

アジアから学ぶ③

前回に続いて海外からの話題から。

現在、国会(参議院)では外国人の収容のあり方を見直す「出入国管理及び難民認定法(通称:入管法)」の改正を巡る審議が大詰めを迎えており、日本に居住する外国人を取り巻く制度が大きく変わろうとしています。その最中、5月20日(土曜日)、練馬区平成つつじ公園にて第3回難民・移民フェスが開催されました。この催しは、日本で生活する外国人、特に母国からの差別や弾圧から逃れて来た人々への支援と理解を深めようと企画されたもので、約20のテントで民族色豊かな手作り料理や手工芸品の販売、公演なども行われました。NHK テレビや TBS テレビなど多くのメディアでも取り上げられました。

難民・移民という問題は、ヨーロッパのように陸続きで国境を接する地域や、狭い海域によって隔てられた地域では、過去の紛争や戦争を踏まえ、難民や移民の受け入れるという問題は身近な社会現象・社会的義務とも言えるでしょう。

一方、日本においては、教育や職場で多様性とグローバルな社会の到来と理解が声高に叫ばれているものの、外国人の具体的な受け入れ策はまだまだ先が見えません。少子化の進展と高齢者死亡率の上昇により人口減少が加速しており、厚生労働省によれば2070年の日本の総人口は8700万人に、また2066年には在留外国人労働者の割合が総人口の約1割に達すると言われています。

とは言え、国会内外での議論においては、外国人、特にアジアやアフリカ諸国からの難民や移民の受け入れには消極的と言わざるを得ません。事実、難民をめぐる問題は諸外国に比べて相当厳しいのが現状です。比較的距離の近いアジアから労働者の協力はなくてはこれからの日本の労働市場も立ち行かないと考えられています。こうしたことを踏まえ、私たちにとって、外国人居住者の問題はどうかあるべきか、またどのような意義をもたらすか、自分事として積極的に考えておく必要があるでしょう。



